

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：23902

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20029

研究課題名（和文）ロマン主義文学と死生観の変容

研究課題名（英文）Romantic literature and the transformation of views of life and death

研究代表者

数森 寛子（Kazumori, Hiroko）

愛知県立芸術大学・美術学部・准教授

研究者番号：10588239

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フランス・ロマン主義時代における死生観に焦点を当て、19世紀後半の時代の、超自然的現象への関心の高まりや精神世界の探求の基盤となった、文化的・思想的背景を捉えなおすことを目的とした。文学作品や同時代の論評の分析から、ロマン主義時代の思想と、第二帝政期の文学・思想・社会現象との連続性を明らかにすべく努めた。国際シンポジウムでの発表や、論文として、成果を公表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀前半の時代にロマン主義文学とともに広まった「死後の生」という思想が、19世紀後半に至り、伝統宗教としてのカトリック、理神論、汎神論、新興の「宗教的なもの」としての交霊術やスピリティズムと、複雑な位相で結びつきながら、既存の宗教とは異なる、新たな宗教性を帯びた作品として結実していく過程を考察した。19世紀フランス全体を視野に入れた、宗教・スピリチュアリティ・文学の関係性を考える上での端緒を開いた。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the view of life and death in the French Romantic period, this study aimed to recapture the cultural and ideological background that formed the basis for the growing interest in supernatural phenomena and exploration of the spiritual world in the late 19th century. Through analysis of literary works and contemporary commentary, we have sought to clarify the continuity and development between the ideas of the Romantic period and the literature and thought of the Second Empire. We were able to publish our findings in the form of presentations at international symposiums and articles.

研究分野：十九世紀フランス文学

キーワード：ロマン主義 ヴィクトル・ユゴー

1. 研究開始当初の背景

第二帝政期のフランスにおいて、スピリティズム (spiritisme) は、特定の宗教に対する信仰心をもたないながらも、精神的なよりどころとして「宗教的なもの」をもとめる人々を強く惹きつけた。一方で、カトリック教会もまた、次々と「奇跡」を承認し、大衆の大きな関心を引くことになる。すなわち伝統的な宗教と、新興の「宗教的なもの」、その両者がともに人々の熱烈な関心の的となり、信仰の復活そして「新たな信仰」の誕生という、二つの異なる宗教的な現象が同時に起こっていたのである。フランスでは1852年以降、テーブルの打音を用いた降霊術の実験が大流行する。そして1857年には、アラン・カルデック (本名イポリト＝レオン＝ドゥニザール・リヴァイク) による『霊の書 (Livre des Esprits)』が出版され、フランス・スピリティズムが幕を開ける。しかし、アメリカに起源をもつ「霊界」との交信をうたったスピリティズムは、なぜとりわけ第二帝政期 (1852-1870年) のフランスで熱狂的に受け入れられたのだろうか。本研究は、スピリティズムの拡大とほぼ同時期に、カトリック教会による「奇跡」の承認と、聖地巡礼の大流行が起こっているという事実に着目した。例えば、ルルドの聖母の出現は1858年、すなわちアラン・カルデックによる『霊の書』の出版の翌年にあたる。この聖母の出現は、1862年に司教によって正式に認められ、その後、ルルドという新たな聖地で病が治癒した事例が、次々と承認されていくことになる。こうした事象は、社会学や宗教人類学の研究対象となってきたが、第二帝政期のフランスにおいて、宗教熱とスピリティズムという二つの異なる流行が同時に生み出された理由は検証されてこなかった。本研究は、この二つの社会現象が生み出された要因の一つとして、この時代に特有の思想的な基盤に着目し、文学作品や論評等、様々な種類のテキストの分析を通じて、その実態を分析する試みとして開始された。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、フランスのロマン主義文学に見られる死生観を、十九世紀後半の時代における伝統宗教の再興と、新興の「宗教的なもの」との関係という視点から、多角的に再検討することを目的とする。

(2) フランス第二帝政期における宗教熱の高まりとスピリティズムの流行の分析から出発し、ロマン主義時代の文学によって広められた「死後の生」という思潮こそが、超自然的な現象の称揚による信仰の復活と、新興の「宗教的なもの」の流行による精神世界への傾倒という、二つの異なる宗教的な現象を同時に生じさせた、思想的な基盤となっていたことを明らかにすることを目的とする。

(3) 同時に、降霊術による「霊界」との交信や、聖母の出現、聖地巡礼により病が治癒するという「奇跡」、こうした従来の科学では説明できない事象を、文学者や知識人たちが、いかに解釈しようとしたのかを解明し、十九世紀フランスにおいて、新たな「生」と「死」の概念が形成されていく過程を浮き彫りにする。

3. 研究の方法

スピリティズムに関する先行研究としては、降霊術の流行を社会史的観点から分析する、ギヨーム・キュシェの『墓の彼方からの声-テーブル・ターニング、スピリティズムと十九世紀社会』 (Edition du Seuil, 2012) が挙げられる。また国内では、稲垣直樹『フランス 心霊科学 宗教と科学のフロンティア』 (人文書院、2007年) が、ユゴーが残した「降霊術ノート」の分析、アラン・カルデックや、天文学者のカミーユ・フラマリヨンといった「心霊科学」実践者たちの思想の考察を通じて、フランス革命以降、宗教的ヘゲモニーが弱まっていった社会の中で、「心霊主義」が「科学」の一領域として出現したことを論じている。

これらの先行研究の成果を踏まえ、本研究は、第二帝政期において、実際には、カトリック教会の影響力の衰退はなく、むしろフランス国内のコングレガシオン (修道会) や信徒数は爆発的に増加していたという点に着目した。本研究の独創性は、スピリティズムの大流行とカトリック教会の「成長」は、実は同期して起こっていた社会現象であることの確認から出発する点にある。それにより、本研究は、多くの作家や知識人が降霊術に没頭し、大衆がカトリックの「奇跡」に熱狂するという、二つの現象を生み出した、第二帝政期の思潮の特殊性を考察し、十九世紀における死生観の変容を浮き彫りにすることを試みた。また、本研究課題に関連するシンポジウムや研究会に参加し、研究の射程を広げることに努めた。

4 . 研究成果

本研究は、ロマン主義文学を主たる研究対象としながら、十九世紀フランス全体を視野に入れ、宗教・スピリチュアリティ・文学の関係性を捉え直そうという試みである。実際の研究課程においては、研究会やメールなどを通じての意見交換や、シンポジウムへの参加を通じて、研究を掘り下げるとともに、大きく発展させることができた。ロマン主義時代に流行した「夢想」のテーマは、死・狂気・他界と不可分に結びついたものであったが、このテーマが、第二帝政期において、新たな注目をあつめ、空想やイマジネーション、インスピレーションの問題として、多くの作家によって再検討されていくことを明らかにし、その成果を国際シンポジウムで発表した（Hiroko Kazumori, *L'esthétique de la rêverie : lire Promontorium somnii de Victor Hugo*, Colloque international « Le romantisme et la littérature du Second Empire », 2023.）。また、この発表に基づいた論文が、2025年に刊行されることが決定された（Hiroko Kazumori, *L'esthétique de la rêverie : Promontorium somnii de Victor Hugo, Flaubert. Revue critique et génétique*, 33, 2025.）。第二帝政期のフランスにおける交霊術の流行とアラン・カルデックによる哲学としての「スピリティズム」成立の年代を再検討し、スピリティズムに影響を受けたとされる作家が、実際には、スピリティズムに先駆けていたことを明らかにした。加えて、作家による「他界」の概念の理解を考察し、論文として発表した（数森寛子、第二帝政期における交霊術の流行、愛知県立芸術大学紀要、53号、2024年、21～29。）研究当初は、伝統宗教としてのカトリックと、新興の「宗教的なもの」としてのスピリティズムの対比、その両者に対する文学の関係性に着目していたが、研究会や意見交換を通じて、19世紀フランスにおいて、汎神論が作家に与えた影響の重要性を認識することができた。そこで、研究の射程を広げ、新たな第三の軸として、汎神論に着目することで、作家の「神」をめぐる思想をより深く、多角的に分析することが可能となった。その研究の成果は、国際シンポジウムで発表した（Hiroko Kazumori, *Victor Hugo et la vision pantheiste*, Journée d'étude « Littérature et Panthéisme », 2024.）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 数森 寛子	4. 巻 53
2. 論文標題 第二帝政期における交霊術の流行	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 21～29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34476/0002000044	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Kazumori	4. 巻 33
2. 論文標題 L'esthetique de la reverie: Promontorium somnii de Victor Hugo	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 Flaubert, Revue critique et genetique	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Hiroko Kazumori
2. 発表標題 L'esthetique de la reverie: lire Promontorium somnii de Victor Hugo
3. 学会等名 Colloque international " Le romantisme et la litterature du Second Empire"（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroko Kazumori
2. 発表標題 Victor Hugo et la vision pantheiste
3. 学会等名 Journee d'etude "Litterature et Pantheisme"（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------